五山文學新集

別卷一

玉村竹二編

玉村竹二編

五山文學新集

別卷一

東京大學出版會

学術書刊行基金

編者略歴

明治44年　名古屋に生る
昭和10年　東京大學文學部國史學科卒業
同　　年　東京大學史料編纂所員
昭和44年　東京大學史料編纂所教授を退官
昭和48年　『五山文學新集』本巻6册校刊により
　　日本學士院賞授賞

著　書

『五山文學』至文堂
『夢窓國師』平樂寺書店
『圓覺寺史』春秋社（井上禪定共著）
『如拙・周文・三阿彌』講談社（『水墨美術大系』
　第6巻，松下隆章・金澤弘等共著）
『日本禪宗史論集』思文閣出版

現住所　東京都杉並區上荻4丁目4番5號
　　杉並コーポラス303號

五山文學新集　別巻一

1977年3月31日　發行

検　印
廢　止

© 編　者　玉村竹二（たまむらたけじ）
發行者　加藤一郎

發行所　財團法人　東京大學出版會
113　京東都文京區本郷　東大構內（811）8814・振替東京 6-59964

ヨシダ印刷・矢嶋製本

3395-86240-5149

五山文學新集

別卷一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

序

昭和四十二年春、『五山文學新集』の第一卷を公にしてより六年、四十七年夏には、その第六卷の校刊を完了し、これで當初の豫定の刊行は略々完結した。たゞ第六卷に收錄する筈で、既に組版も終つた江西龍派集約三百三十頁は、同卷がそれ以外の人の作品集で、既に一千三百十五頁に達し、若し之を加へると、一千六百頁の巨册となり、製本にも困難を加へ、利用者にも大册過ぎて、不便を與へるし、價格の點でも不都合なので、已むなく割愛し、「組置き」として、將來の機會を待つことになつたのである。既にこの時點に於て、續卷とか補遺とか、または別卷といふものが生れなければならない事情は丕胎してゐたのである。

案の如く、昭和四十九年になり、東京大學出版會側から、「組置き」の分の刊行を慫慂された。この時にはこの分は一應校了にして（昭和四十七・八年の間に）あり、紙型が採られてゐたのである。この慫慂をよい機會として、編者側からも希望を申出た。その希望とは、單に組置き三百三十頁江西龍派の作品のみでは誠に寂しいので、本卷六卷のうちに是非入れたくて、事情によつて漏したもののうちで、乾峰士曇の作品集と、心田清播（せいは）の作品集を之に加へたいといふのが第一の要望であつた。前者は、嘗て第二卷に收めた友山士偲の『友山錄』と、內容的に密接な關聯があるからであつて、一方が收められ、一方が除かれるといふのでは、史料集として、利用者に不親切となるからでもある。それは友山と乾峰とは同じく南山士雲の門下の同門の友人で、共に行動してゐる事が多く、作品としては乾峰の方が多く、『友山錄』に

於て片鱗を窺へた事實が、『乾峰錄』によつて、更に詳密に判明するといふことが少くないのである。その故に乾峰の作品も是非とも『五山文學新集』のうちに收めたかつたのである。後者は、世に江西・心田と竝稱される室町時代中期、北山時代と東山時代との中間に介在する嘉吉・文安年代に活躍した作者として、どちらを落すのも片手落になると思ひ、これも利用者の便宜を慮つて、江西を收めることになつた以上、心田の作品も必ず相竝べて入れたいと切實に思ひ、これの方は稍々準備不足で、些か泥繩的であつたが、結局はその作品の九分通りを揃へて收めることが出來た。

さて、以上三人の集のみでは、未だ一册とするには、從來の基準から見ると少い。よつて考へついたのは、本卷の方は、各作家の家集を集めて收めて來た。それが一應完結したいま、更に一卷を世に出すのに、卷帙の名稱をどうしようかといふことである。そこで編者が案出したのが、「別卷」といふ稱呼である。別卷といふ稱呼は、本卷六卷とは、何等かの點で特殊な性格をもつたものである事を印象づけるものである。その特殊な性格付けとして考へたのは、「特輯」といふことである。五山文學にもいろ〳〵の遺り方があつて、家集として傳承されるのが本筋であるが、その他に、詩會の記錄として遺ることもあり、雜記として多くの人々の作品の斷片が雜然と集めて遺されることもあり、また從來殆ど顧みられなかつた「聯句」といふ一部門もある。またある特別な一門派が特に文筆活動が活潑である場合、その派の作品のみを特輯するといふやうなことも意義があるのではないか。勿論、全卷を特輯のみで覆ふのは、需要の面で問題があるかも知れないから、卷頭に少し、家集のうちで收めのこしたものを入れ、後半を特輯としたらどうであらうかと思ひ、「別卷」を出すなら一卷に停めず、三四卷刊行してはどうかと提案した。三・四卷刊行の確諾は取れなかつたが、少くとも一册のみで終ることをせず、二册迄出すことは、出版會當局と了解がつき、本册を「別卷一」と銘打つことになつた。そして特輯として、「詩軸」を採上げ、「詩軸集成」といふものを編輯して見た。詩軸はある一時の詩會の記錄

であるのが本來であるが、時として問題の詩の追和または追賦のこともあり、また時としてはそれが板に刻られて詩板となつてゐることもあり、軸や板は失はれ、內容のみが後世の寫本として傳はり、または木版としてその內容が世に公にされてゐるものもあるが、今回は「詩軸」の語を廣い意味にとつて、これらを總べて收めた。これらには一流作家のものもあるが、無名な作者のものが、そこに見えるその一首のみ殘るといつたものもあり、五山文學の底邊を窺ふことが出來る處に、この類のものを收める意義があると思ふ。さういふ無名な零細な作者が大勢ゐる社會に於て、それらの人々の熱氣に勵まされて、超一流の作家も輩出するといふものではなからうか。また本卷六卷では、その收錄家集は室町中期の末といふべきか、文龜・永正年代にとゞまつたが、詩軸では、その限定の枠を取拂つて、江戶時代それも幕末天保年間に及ぼした。これも五山文學史全體の展望の一助にしたかつたからである。

本卷六册の各册の序に繰返して申述べたことであるが、別卷に於て始めて本集を閲覽される方々のために、念のため本集刊行の趣旨を披瀝して置かう。嘗て上村觀光居士によつて刊行された『五山文學全集』には、五山文學の主要な作品が收錄され、大正初年以來、學界を益すること多大であつたが、惜むらくは、もう一歩といふところで中斷してしまつた。且つ文學作品としての價値以外に、歷史の史料としての價値を認めるとすれば、なほ更に多くの未刊の五山文學作品があり、そのうちには、一流のもので、まだ一般世人の目に觸れることなくして埋もれてゐるものも一二に止まらない。これは斯學のために、甚だ遺憾である。どうにかして、これらを公刊したいといふ趣旨から、戰前に於て、既に元東京大學史料編纂所長森末義彰氏（當時は史料編纂官であつた）が、この集の企劃を立て、その手始として、橫川景三の『補庵京華集』（本集本卷第一册所收）を手がけ、原稿作成の段階まで行つたが、戰爭の熾烈化によつて、その計劃は頓挫した。それを昭和四十年春、當時の史料編纂所長竹內理三氏が復活され、東京大學出版會から刊行されることになつ

た。もつと詳しい經緯は、本卷第一卷の序に述べておいたから、それに讓るが、以上のやうな事情で生まれたのが本集であり、名づけて『五山文學新集』といひ、一應『五山文學全集』とは別個のものとし、未刊のものを優先するとはいへ、『全集』を含めて、他の叢書所收のものなど、おしなべて、既刊のものと雖も、それよりもよい本を得れば、それを底本として、本集に收錄した。例へば雪村友梅の『岷峨集』、中巖圓月の『東海一漚集』及びこの別卷一に收めた『心田詩藁』『續翠詩藁』などがそれである。また時としては、泥中の白蓮の如き、未知の作者の珠玉篇をも、その間に交へて收載し、世に紹介しようとすることも敢て行つた。例へば在庵普在の弟子某の『雲巢集』（本卷第四卷所收）、一峰通玄の『海滴集』（本卷第五卷所收）の如きである。

乾峰士曇の作品は『乾峰和尙語錄』のみであるが、可成の巨册であり、逐一讀み進む程に、その文藻の豐かなのに惹かれて行く思ひであつた。從來、木版本を以て、多少世に流布してゐるにも拘らず、意外に知られてゐない。今回それを世に出さうとするのも、さきに述べた『友山錄』と不即不離の關係に在り、常に一雙のものとして考へるべきであるといふ理由以外のもう一つの理由は玆に在る。江西龍派は、黃龍派一派の文筆僧として、既に龍山德見・正宗龍統を收めた以上、どうしても取上げなければならない人である。絕海中津より四六文と詩の作法について教授を受け、その晦澁ではあるが、高雅な作風をも有する江西は北山時代末期の代表的作者として、是非收錄しなければならない人である。その上、『續翠詩藁』（『續群書類從』文筆部所收）以外は、未刊のものばかりで、而も建仁寺兩足院に、自筆又はそれに近い古寫本があり、底本にも惠まれてゐるので、今回玆に收錄することにしたのである。江西・心田と竝稱される心田は、江西の作風とは正反對で、この時代の爛熟の面を代表する人である。その作品はその詩集の一たる『心田詩藁』のみは『續群書類從』文筆部に收められてゐる爲に、世に知られてゐたが、その外は、未知のものばかりである。その四六文

集『心田播禪師疏』や『心田和尙語錄』は、共に建仁寺兩足院に古寫本があるが、これらによると、心田といふ人は、その詩に見るが如く、纖弱な作風とばかりは言へず、案外構成のしつかりした面をも持つて居り、幅の廣い複雜な性格の人であることがわかつた。また『心田詩藁』とは殆ど別の詩集『聽雨外集』が東京大學史料編纂所に在るので、之をも併せ收めて、初めて世にその眞價の程を問ふことにした。

この卷の校訂刊行に當つても、和漢の文獻に通曉した前田育德會尊經閣文庫常務理事の太田晶二郎氏の御示敎を蒙つた。外典故事の出典、難讀な文字の解讀については、同氏の御敎導に遵つた。但し太田氏も私も史料編纂所を辭した今日は、本卷六册校訂の際のやうに、毎日顏を合せることが出來ず、往々にして、私の獨斷專行で、事を運んでしまつた場合が極めて多くなり、從來よりは御示敎を受ける度合が少くなつたのは遺憾である。それ故、今迄より一層この方面の事で誤謬が殘つてゐる事と思ふが、それは同氏に敎を請はず、さかしらに自己流でやつてのけたためである。また縱へ敎を受けた場合でも、その趣旨を誤解したために生じたものもあるであらう。若しさういふ誤謬があれば、その責任は、專ら私に在るのである。玆に更めて篤く御禮申上げる。

次に印刷校正については、從來毎册原本當りの校正を再校の段階でお願してゐた千葉大學の田中久夫氏が、この册では、折惡しく、一時的にではあるが、視力を害された爲に、お願することが出來ず、出版會の內校を元山不二子女史・水流京子女史・大江治一郎氏にして戴き、江西龍派集については、五年前に、田中久夫氏のお世話になつて居り、『乾峰錄』については、駒澤大學の葉貫磨哉氏に助成を仰いだが、その外は、專ら私自身のみが行つた。

原稿の書寫は、江西龍派集のうち『續翠稿』を東京大學大學院學生田中博美氏（當時は敎養學部學生であつた）にお願した。組置きのために遲引したが、お蔭を以て、その部分も今回日の目を見ることになつた。更めて謝意を表する。そ

の他は悉く自力で書寫した。但し昭和四十八年より昨年五十一年迄四年間をかけて、體力に應じて、徐々に書寫したので、從來程心身をすりへらすことはなかつた。

更に本文採訪撮影については、建仁寺兩足院本の『續翠稿』『江西和尚語錄』『江西和尚語集』に就ては、京都の清水實氏、『心田和尚語錄』『心田疏』及び史料編纂所所藏の『聽雨外集』『江西和尚駢儷』については史料編纂所の高澤實氏を煩はして撮影していたゞいた。『乾峰和尚語錄』『嵐山石頌軸』『昕叔中晫追悼頌軸』は編者たる私の所藏本を用ひた。

また諸本の閲覽については、東京大學史料編纂所には『聽雨外集』を底本として、『江西和尚駢儷』『江西一節集』『春耕集』を校訂本として、國立公文書館內閣文庫には『續翠詩集』『心田詩藁』を底本として、大東急記念文庫には『一節集』を校訂本として、建仁寺兩足院には、『續翠稿』『江西和尚語錄』『江西和尚語集』『續翠詩藁』『心田和尚語錄』『心田播禪師疏』を底本として、『心田疏』を校訂本として、閲覽撮影利用を許された。記して以て謝意を表する。

また挿入寫眞掲載については、東福寺永明院・建仁寺兩足院・東京大學綜合圖書館の御承諾を得た。寫眞撮影については、すべて史料編纂所の高澤實氏を煩はした。併せて篤く御禮を申上げる。

詩軸集成の部については、あまりにその數が多いので、一應は一々お世話になつた方々に謝意を表するが、或は不注意のために申し忘れた向もあるかと思ふが、それは他意ある譯ではないので、若しさういふ事があつたら、御寛恕を乞ふ次第である。まづ詩板の原物所藏者として、横濱杉田の東漸寺、圓覺寺傳宗庵、鎌倉荏柄天神社、同瑞泉寺、詩軸の原物所藏者として、東福寺永明院（保管者として同寺光明院）、南禪寺金地院・大和竹林院、埼玉縣大宮市淸河寺、茨城縣增井の正宗寺・建仁寺兩足院、『獅子絃』板本所藏者たる松ケ岡文庫、『一帆風』板本所有者たる東京大學史料編纂所、詩軸の記錄または寫本所藏者としての東福寺靈雲院・南禪寺天授庵、金澤市立圖書館・鎌倉瑞泉寺・東京大學史料編纂

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

所・東京芝金地院・鎌倉荏柄天神社・遍照院・水戸彰考館文庫に、篤く御禮申述べる。

詩軸史料のうち、特に強調したいのは東福寺靈雲院所藏の幹山師貞蒐錄の雜錄『集古錄』である。これは昭和二十六年頃、同院より當時の同院塔主故岡根守堅師の御厚意によつて、私の自宅まで拜借帶出して、備さに書寫させて頂いたもので、このうちには『永明獲衣頌』『澄心堂詩軸』『不動亭偈』『常樂拜塔偈』『虎丘十詠』『呑碧樓詩軸』『無我省吾天澤拜塔偈』『無我省吾山居頌和韻』等を含み、非常に貴重な記錄として、本册に重ねゞ引用させて頂いた。加之、同院所藏の他の雜錄『常樂拜塔頌并通天偈』、『龜鑑集』の中の『三嶋廟亭詩』等、同院の所藏本を極めて多く利用させて頂いた。故岡根守堅師の靈前に厚く御禮を申上げると共に同院現董岡根守貞師にも一言謝意を述べる。更に東京芝の金地院（勝林山、所謂江陵金地）には、その戰災を免れた同院記錄の閲覽撮影を許された。玆に改めて同院々主松浦勝道師に深謝の意を表する。また『岳英西堂送別頌軸』のうち、川邊氏所藏の分の閲覽を斡旋して下さつた、もと中日新聞論說委員横井保平氏、及びその所有者川邊正夫氏にも篤く御禮申上げる。また彰考館文庫の『相國寺前住籍』附載の『悠然亭詩軸』『滿湘八景賛』『等持院屏風賛』『奉答賦紅葉和歌詩軸』等は、同書が文明年間の書寫であることが、最近判明したので、一層貴重さを増した。同文庫長香取正次氏に閲覽撮影を許された事を厚く御禮申上げる。またその撮影に就て、同文庫の角田重美氏にお世話になり、更に重ねて、史料編纂所の皆川完一・今泉淑夫兩氏にその再調査に就て御厄介になつた。また多くの底本を提供して下さつた建仁寺兩足院主伊藤東愼師には、毎度の事ながら、格別の御取計ひを受け、御蔭を以て、校訂作業の上に、この上ない恩惠を蒙つた。別して感佩の至に存ずる次第である。

これら總てのことを含めて、東福寺永明院の平住溫洲師、同光明院の佐々木元果師、國立公文書館內閣文庫の福井保氏・木藤久代女史、大東急記念文庫の西村清氏・岡崎久司氏・竹內順一氏、鎌倉國寶館長貫達人氏、同館の山田泰弘氏、

瑞泉寺住持木下豐道師、東漸寺住持伊達精秀師、石井光太郎氏、東京大學史料編纂所長土田直鎮氏、同所の今枝愛眞・新田英治・今泉淑夫・山口隼正の諸氏、及び瀧田英二氏・中川德之助氏・安良岡康作氏・葉貫磨哉氏には、有形無形の助言・激勵・閲覧の便宜の取計ひを賜はつた。

終に、この出版に際しては、東京大學出版會の石井和夫・中平千三郎・成田良輔・大江治一郎の諸氏に、一方ならずお世話になり、また御迷惑をかけた。こゝに改めて御禮と御詫を申上げる。

なほこの出版は、文部省昭和五十一年度科學研究費補助金（研究成果刊行費）の交付を受けて成就したものである。

昭和五十二年三月四日

玉村竹二

凡例

一、五山文學新集は、鎌倉時代より江戸時代に亘る日本五山禪林の漢文學作品を、校訂刊行するものである。その作者が宋・元・明の來朝僧であらうと、日本僧であらうとを問はず、また一部の詩文集のうちに包含される法語・語錄的な部分をも削除せずに收載するのを基本方針とする。

一、本集の「本卷」は六卷六册を以て、一應完結したが、なほ收錄すべき作品が多數あるので、別卷として、之を續刊することとした。本卷はその第一册であり、「別卷一」と稱する。

一、別卷といふ以上、「本卷」と多少編纂方針を異にする。即ち各卷の大半を、特輯にすることにした。差當り、この卷には、後半に「詩軸集成」を編輯して、之を加へた。その前半には、「本卷」第六卷に收めるべきもので、頁數超過のために「組置き」とした江西龍派の作品、それに續いて乾峰士曇・心田清播の作品を收めた。

一、卷末に各集の解題を附した。その解題は作者の傳記、底本及び校訂本として用ひた諸本の解說、作者關係宗派圖より成る。但し詩軸集成に就ては、各詩軸の書誌的解題を附するにとゞめた。

一、心田清播（せいは）の作品集については、當初は『聽雨外集』と『心田播禪師疏』のみを收錄する豫定であつたが、その後『心田詩藁』の寫本が內閣文庫に、また『心田和尙語錄』が建仁寺兩足院に在ることに氣附き、寫本がある以上、收錄すべきであるとして、結局心田の殆ど全作品を收錄するやうに計劃を變更したので、準備が立遲れ、出版期限が迫

つたので殘念ながら、諸本に共通の作品の對照の番號照應が出來なかつた。

一、詩文の題は四字下りに一定し、七言絶句の場合、底本に於て、詩題が詩の後の餘白に記されてゐることがあるが、校刊に際しては、それらを悉く詩の前に移し、四字下りにして示した。但し詩軸集成に於ては原本のまゝとした。

一、底本の讀點（とうてん）にとらはれず、新たに讀點と竝列點とを施し、底本の返點・送假名（殆どないが）は省略した。但し振假名は、解讀に便益ありと認めた場合にのみ、これを殘置した。

一、底本の字傍の朱點・朱圈・朱線は、原則として頭書に註した。

一、底本の朱引は省略した。

一、用字は、なるべく底本通りにするやうにつとめた。但し前項に觸れたやうに、底本の新古にしたがひ、多少緩急の差をつけた。左の括弧内に示す文字は、各本に共通して、括弧外の字體に統一した。また誤字訂正の傍註の場合、その誤謬の由つて來る理由を示すに必要と思つたときは、括弧内の字を故意に註したこともある。

圓（円を用ひず）　與（与）　圍（囲）　離（离）　學（学　斈）
劉（刘）　對（対）　關（関）　數（数）　聲（声　声）
覓（覓）　含（含）　來（来　来）　盡（尽）　圖（図）
乘（乘）　昂（昂）　雙（双）　舊（旧）　擧（挙　斈　丮）
實（実）　璵（玙）　嶼（屿）　點（点）　籬（篱）
桑（桒）　獨（独）　答（荅）　厭（猒）　處（処　處）
還（还　逅）　流（汥）　壓（壓　圧）　佛（仏）　拂（払）

燈（灯）　亂（乱）　屬（属）　囑（嘱）　邊（辺）
廬（庐）　爐（炉）　爲（為）　所（所）　回（回 回）
凡（凡）　壑（壑 壑）　擇（択）　澤（沢）　釋（釈 尺）
國（国）　前（歩）　勢（勢）　要（要）　蘆（芦）
函（函）　涵（涵）　祇（祇「たゞ」「つゝしむ」の場合）　龍（竜）
龜（亀）　嘗（嘗）　告（告）　浩（浩）　號（号）
萬（万）　寶（宝 寶）　濱（濱 浜）　賓（賓）　壹（壱）
會（会）　周（周）　即（即）　你（爾 你）　尓（尓）
譽（誉 訾）　象（象）　像（像）　藝（芸）　龜（亀）
虎（虎）　寒（寒）　冬（冬）　於（於）

一、同一文字にして二體以上を併用した主要なものは左の通りである。いづれも底本のそれぞれの箇所の用字に従つたもので、同一底本でも、箇所によつてまち〳〵の字體を用ひてあることは勿論である。

歸 帰 皈　叢 叢 叢　蓋 蓋　筆 筆 毛　等 等 ホ
遷 迁　得 得　聞 聞　虛 虚　鼎 鼎
船 船　算 算　答 答（荅は用ひず）　柏 栢
侍 侍　時 时　詩 詩　紙 帋　節 節
館 館　役 役　秋 秋 秋　龜 龜　靈 灵　總 総

蘇蘇　書昏　徒徒　草艸ヤ　年季
聰聡　事亥　鬢鬒　條條条　寶珤（宝寶は用ひず）
後后　洲洔　州洔　國囮囲（国は用ひず）
淵渕　困　養粮（餈は用ひず）　也乞　花苍華
稿藁　藁　邇迩　爾尓（尓は用ひず）　稱称
雪霽（彗は用ひず）　陽易　裏裡　腸腸
賢賢　野埜　臺臺台　宜宜　誼誼
圖啚　啚（図は用ひず）　峰峯峯　岸岸　崖崖
海海　溪谿　篇篇　梅楳　霉霉　潛潛
會会（会會は用ひず）　村邨　窓窗　窗窗　叟叟　交交
床牀　嶽岳　幹榦　以目　似侶
富冨　嘲嘲　天夭　春舂　辭辞
道衜　貌貌貌　修脩修　須須　韻韵　匂
松案　杰　嶺嶺　妙妙　群羣　香薌
嗣冊　體体躰　獨獨　無无　堂坐
珍珎（琢は用ひず）　笑咲　巖岩　嵒嵒　雁鴈
島嶋　仙僊　風凧　衆众　裏裏

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com